# ふるさと所沢早わかり本

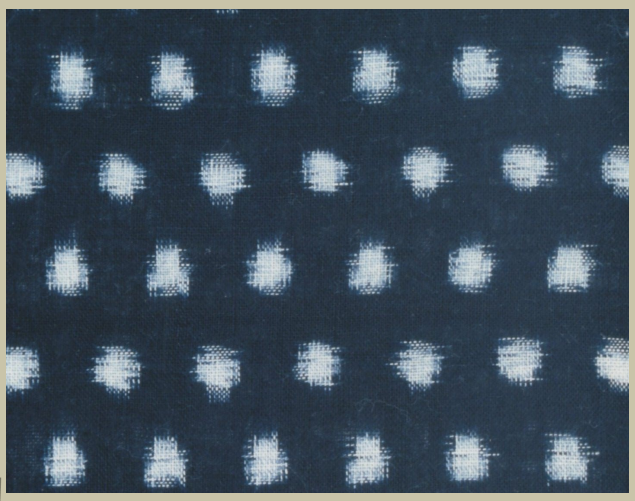
市の中心にあるこの風景、
こうなるまで色々ありました

草ぶき屋根の中に瓦ぶきが数軒、
家々が面したこの道はどこへ通じる道？

おまつり？縁日？
いえ、月に6度の「いつもの」風景です

台地の農業に欠かせない作物
名物の食べ物にも影響しています

地平を染める美しい夕日を
昔の人々も見たのでしょうか



糸を染める、布を織る
昔の手仕事は苦労がたくさん

# ふるさと所沢について知ろう！
# もっと学ぼう！

所沢の歴史を**すばやく知る**ための**16ページ**です。

まずはざっと目を通してみてください。
まったく知らなかったこと、聞いたことがあるようなこと、
ちゃんと知っていたこと、色々見えてくるでしょう。

それぞれについてもっとくわしく知りたい時は、項目ごとの
**もっとくわしく**で紹介した本のページを見てみてください。
**もっとくわしく**で取り上げた本は16ページで紹介しています。

## 「ふるさと所沢早わかり本」について

本書は、所沢の歴史・民俗について概観していただけるようまとめた「早わかり本」です。

本市の歴史は、古くは３万年以上前の旧石器時代にまでさかのぼります。武蔵野台地や狭山丘陵のような自然条件のなか、人々はさまざまな工夫をし、創意ある暮らしを営んできました。

こうした先人たちのあゆみを後世に伝えるため、所沢市では「ふるさと所沢」に関する資料を収集・整理・保存し、それらについての調査・研究を行い、その成果を展示や講座等の事業を通じて広く紹介する「ふるさと研究活動」を、市民とともに進めています。令和３年には、文化財保護課と生涯学習推進センターふるさと研究グループを統合し、所沢の魅力をさらに幅広く発信していく体制を整えました。

所沢市では、昭和４８年から２０年の歳月をかけて編纂した『所沢市史』全１４巻のほか、その成果をコンパクトにまとめたダイジェスト版『ところざわ歴史物語』などの関係刊行物を多数刊行しておりますが、さまざまな形で本市に縁を持つことになった方が、所沢について知り、関心を深めるために、まず手に取る一冊となることを願って本書を作成しました。本書が、未来を担う子どもたちをはじめとする多くの方にとって、ふるさと所沢の魅力に関心を抱くきっかけとして役立つことを念じてやみません。

**表紙写真**

左上　空から見た基地跡地　　右上　『秩父順拝図絵』より所沢宿略図
左中　三八の市　　右中　麦畑
左下　小手指原古戦場跡　　右下　所沢絣（マルマメ）

**写真提供（敬称略）**

独立行政法人国立公文書館内閣文庫（秩父巡拝図絵）　桑原キヨ（三八の市）
市立埋蔵文化財調査センター（縄文時代の土器・東山道武蔵路）　三上武壽（料亭「婦多佳美」での防火訓練）　肥田野憲一（市制施行記念山車まつり）
冨田澤嗣（昭和14年頃の仕事着）

## 所沢まめ知識


地名の由来 ・・・・・・・・・・・・・３
市の木・花・鳥 ・・・・・・・・・・・３
　いちょう　茶の花　ひばり
市章の由来 ・・・・・・・・・・・・・３
所沢市のシンボルマーク ・・・・・・３
所沢市のマスコット「トコろん」 ・３


## 所沢の自然


所沢の地形 ・・・・・・・・・・・・・４
所沢と水 ・・・・・・・・・・・・・・４


## 古代


遺跡に見る大昔の所沢 ・・・・・・・５


## 中世


武士と戦乱の時代に ・・・・・・・・５


## 近世


江戸時代のはじまり ・・・・・・・・６
　旗本の墓
台地にひろがる暮らし ・・・・・・・６
農民の生活 ・・・・・・・・・・・・７
三八の市と所沢の町場 ・・・・・・・７


## 近代


明治維新と所沢の近代化 ・・・・・・８
　明治天皇行在所跡
繁栄への道のり ・・・・・・・・・・８
飛行場の開設と所沢 ・・・・・・・・９
　木村・徳田両中尉墜落事件
戦争の中で ・・・・・・・・・・・・９


## 現代


戦後の所沢 ・・・・・・・・・・・・１０
基地返還とオリンピック ・・・・・１０
全国に知られる街へ ・・・・・・・１１
新たな時代、新たな価値観 ・・・・１１


## 民俗


昔のくらし ・・・・・・・・・・・・１２
所沢の郷土食 ・・・・・・・・・・・１２
まつりと民俗芸能 ・・・・・・・・・１３
伝統産業・地場産業 ・・・・・・・・１３

# 所沢まめ知識 その一

## ○地名の由来

所沢の地名の由来は、実のところはっきりしません。室町時代に都からやって来た高僧が、その旅の途中所沢を訪問し、観音寺（現在の宮本町新光寺と言われています）でもてなしを受けました。その感想を「野遊（のあそび）のさかなに山のいもそへてほりもとめたる野老沢（ところざわ）かな」という歌に読みました。「野老（ところ）」とは、ヤマイモ科の植物のことで、ところざわという地名と肴（さかな）に出された「山のいも」をかけた歌になっています。

地名の由来は明らかではありませんが、この話から「所沢」の地名とこの植物が昔から結び付けて考えられてきたことがわかります。

トコロの葉

## ○市の木（いちょう）

扇形をした葉が秋には黄色く染まって散ります。ギンナンと呼ばれる実は食用になります。大気汚染にも強い落葉樹です。

## ○市の花（茶の花）

入間地区は、狭山茶の産地として名が高く、初夏にはみずみずしい緑が茶畑に広がります。初冬には、椿に似た小さな白い花を咲かせます。

## ○市の鳥（ひばり）

麦畑などに巣を作り、空中でほがらかにさえずります。畑が多かった昔はよく見かけることのできる鳥でした。

市の木・花・鳥は、昭和48年（1973）に市民の公募により、自然保護思想を高めるため選定されました。

# 所沢まめ知識 その二

## ○市章の由来

所沢の市章は、昭和30年（1955）11月に、市制施行5周年と、この年4月の三ケ島村、柳瀬村との合併を記念して制定されました。トコロの葉を図案化したもので、周囲に3つの「ワ」という字をあしらい、「輪」や「和」への願いを込めています。

## ○所沢市のシンボルマーク

市制施行50周年を記念して制定されました。デザインは、所沢市の魅力の一つでもある狭山丘陵や日本の航空発祥の地をモチーフに、「緑豊かな未来都市への飛翔」をイメージし、飛行機をベースに、色は青い空と武蔵野の緑を表しています。

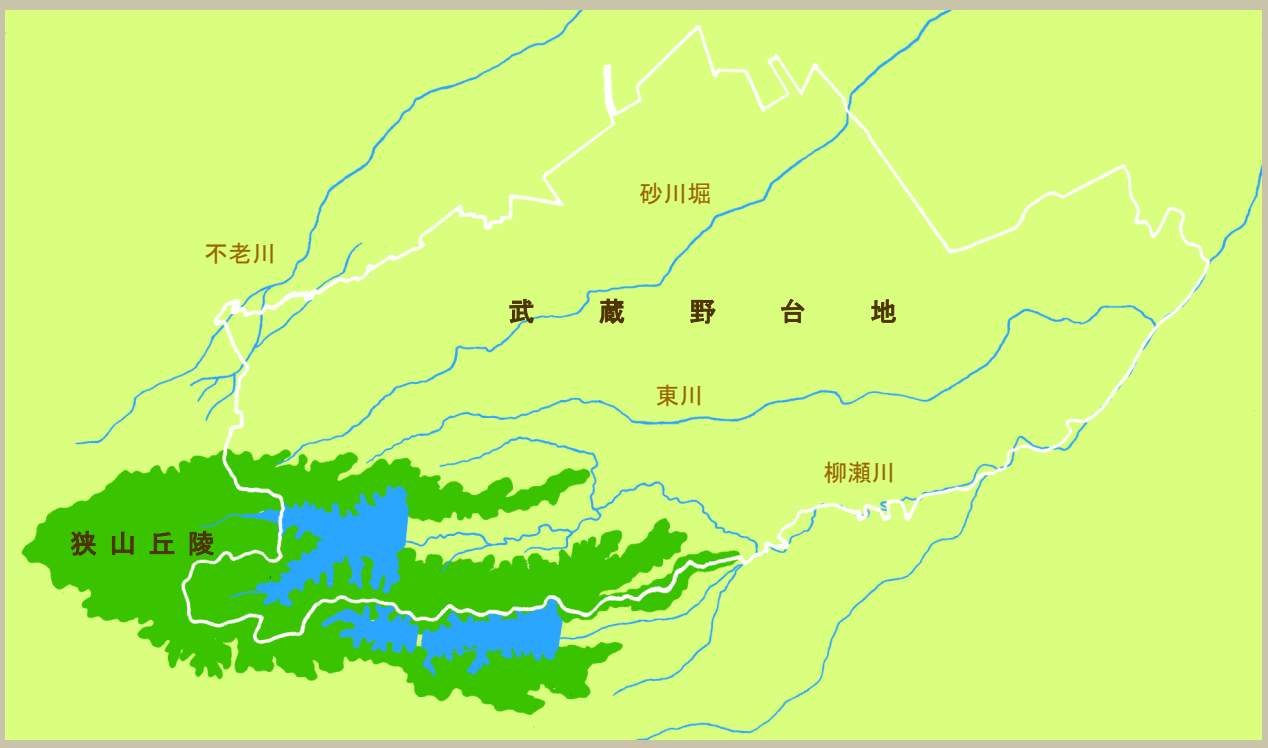
## ○所沢市のマスコット「トコろん」

市制施行60周年記念事業の一環として、平成22年（2010）に誕生した市のイメージマスコットです。市の鳥である「ひばり」と、航空発祥の地にちなんだプロペラ飛行機のイメージから生まれました。

好物は、焼きだんご、うどん、お茶で、最近はさまざまなグッズでおなじみです。

自 然

# 所沢の地形




所沢市は、首都圏から約32ｋｍの埼玉県南部に位置し、面積は約72平方ｋｍあります。丘陵、台地、柳瀬川沿いの低地という３つの特徴的な地形から成っています。

狭山丘陵の名で知られる丘陵は、自然によりそった里山（さとやま）の雰囲気を味わえる場所で、自然保護団体などによる保護活動が盛んです。台地は武蔵野台地の一部で、水の便が悪く暮らしに向かない土地柄でしたが、最近では地盤が安定していることで注目されています。

自 然

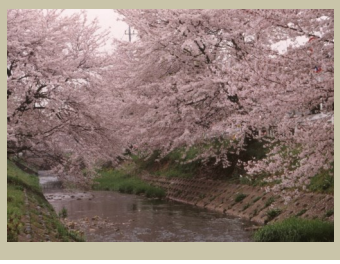
# 所沢と水

## ○柳瀬川

狭山丘陵を削って東に開けた谷を作り、谷を出たあとは埼玉と東京の境を流れて志木市で新河岸川に合流します。市内で一番大きい川で、流域は比較的水に恵まれ、古くから人々が暮らしたところです。

## ○東川

狭山丘陵北側に発し、市域のほぼ中央を西から東に流れ、柳瀬地区で柳瀬川に合流します。一時期、水質の悪化や大雨による浸水被害が問題となりましたが、現在では対策が進んでいます。



西新井町から下流の川岸には桜の並木が続き、春の名所となっています。

## ○砂川（砂川堀）

狭山丘陵北側の小さな湿地から発し、北東方向に流れて富士見市で新河岸川に合流します。水量が少なく、時には枯れて台地に消え、「末無川」とも呼ばれました。

## ○狭山湖（山口貯水池）

上水の貯水池として作られた人造湖です。東京の住民の水がめとして、多摩川から水を引き、昭和7年に完成しました。この計画で山口地区の旧勝楽寺村などの集落が湖底に沈むことになり、300軒近い家がふるさとを離れ移転しました。

**もっとくわしく**

所沢の地形：『ところざわ歴史物語』2～3ページ・『所沢市史　上』3～33ページ

山口貯水池の建設：『ところざわ歴史物語』117ページ・『所沢市史　下』403～405ページ

## 古代

# 遺跡にみる大昔の所沢

### ○旧石器時代

今から約3万年前（後期旧石器時代）の遺跡が市内にもあります。三ケ島三丁目の**砂川遺跡**は、発見された遺物が国の文化財にも指定された重要なものです。

砂川遺跡から出土したナイフ形石器（明治大学所蔵）

### ○縄文時代

市内に160か所以上ある遺跡のうち、一番多いのは縄文時代中期（約5000～4000年前）の遺跡です。定住を始めた人々は、住まいの跡や模様が華麗な**縄文土器**を残しました。

縄文時代の土器

### ○古墳時代

大字山口や小手指南に小豪族を葬ったと見られる円墳が、また大字城や大字北秋津には崖の斜面に横穴を掘った**滝の城横穴墓群**や**北秋津横穴墓群**が見つかっています。

### ○奈良・平安時代

奈良・平安時代の遺跡としては、南住吉・久米周辺の**東の上遺跡**があります。大規模な遺跡で、100回以上の調査によって**漆紙文書**や**東山道武蔵路**の跡などが見つかっており、一般の人が住むムラとは異なる役所のような公的な施設があったと考えられています。

東山道武蔵路の跡（南陵中学校校庭）

**もっとくわしく**

『ところざわ歴史物語』4～14ページ・『所沢市史　上』118～128、129～188、211～223、261～267ページ・『所沢市史　文化財・植物』207～210、221～222ページなど

## 中世

# 武士と戦乱の時代に

小手指ヶ原古戦場跡の碑（北野二丁目）

### ○鎌倉街道と小手指ヶ原

源頼朝が鎌倉を本拠地とすると、東国の各地から鎌倉へ向かう道が発達しました。市内には群馬県方面と鎌倉を結ぶ**鎌倉街道上道**と呼ばれる道が通り、街道沿いの**小手指ヶ原**では、鎌倉幕府倒幕の兵を挙げた新田義貞と幕府軍による元弘３年（1333）の合戦をはじめ、何度も戦いの舞台となりました。

### ○武士と城跡

武士が力をつけた時代、市域には山口氏と名乗る武蔵武士の一族がおり、**山口城**や**根古屋城**などの足跡を残しました。

やがて、南関東を勢力下に置いた大石氏や北条氏が市域を支配するようになり、その出城として**滝の城**が築かれます。北条氏は全国統一を目指した豊臣秀吉に滅ぼされ、北条方に属した滝の城も廃城となりました。

滝の城の堀の跡（大字城）

**もっとくわしく**

『ところざわ歴史物語』16～29ページ・『所沢市史　上』第三編（299ページ～）
『所沢市史　文化財・植物』31～42、47～50ページ・『所沢市史研究　第18号』87～121ページなど

近世

# 江戸時代のはじまり

## ○徳川家康の江戸入りと所沢

天正18年（1590）、関東の支配者となった徳川家康は、江戸城を本拠とし、江戸近郊の村を領地として家臣に与えました。村の農民はこうした領主に米などの年貢を納め、その生活を支えました。

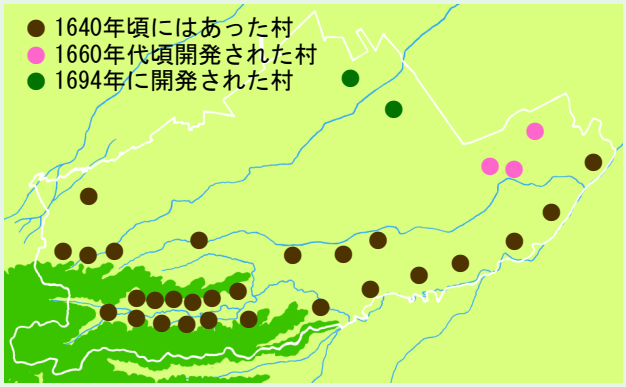
市内の村の多くは、旗本（はたもと）と呼ばれるこのような中級武士の領地と、幕府が直接支配して年貢を取る幕府領から成り立っています。

旗本の墓（山口地区瑞岩寺）

旗本たちは、江戸の町の建設が進むまでは、領地の村に陣屋を構え家族たちと暮らしていました。やがて江戸の町が整備されると江戸に屋敷を建てて移り、村には陣屋の跡や墓所が残されました。

## ○江戸時代はじめの村々

この頃、市域の村は狭山丘陵や柳瀬川沿いの南寄りだけに分布していました。当時の技術では、丘陵の谷あいから流れ出る小さな川や柳瀬川の水を利用できる場所でなければ、生活することが難しかったからです。北寄りの台地には草が生い茂り、人々はそれを刈って肥料や飼料のような生活に不可欠のものとして利用していました。




**もっとくわしく**

『ところざわ歴史物語』38～43ページ

『所沢市史　上』499～532、542～574、589～599ページなど

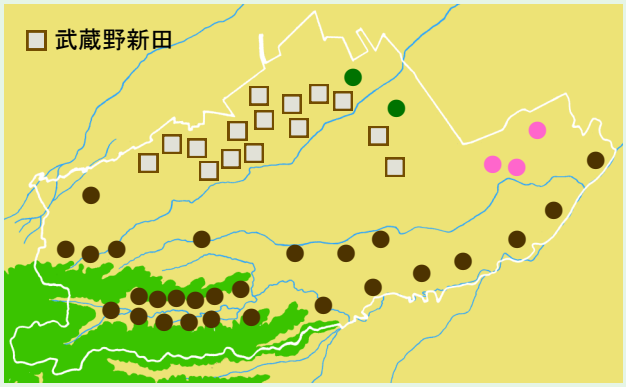
近世

# 台地にひろがる暮らし

## ○三富新田の開発

幕府や藩などの領主層は、年貢を増やすため、まだ耕作されていない台地の開発を考えるようになります。川越藩主の柳沢吉保が手掛けた三富の開発もそのひとつです。

市域の中富と下富、三芳町の上富を合わせて「三富」と呼ばれる地域の開発は、元禄7年（1694年）に始まりました。土地は屋敷と畑と平地林が細長く並んだ短冊形に区切られ、入植した農民に与えられました。




## ○武蔵野新田

江戸時代中期以降、幕府の財政の悪化につれ新田（しんでん）の開発はさらに熱心に進められます。

武蔵野台地一円を対象とした武蔵野新田の開発で、残っていた場所もほとんどが畑となりました。開発は村ごとに割り当てられ、開かれた新田にはその村の名が付きました。中には裕福な個人が開発を肩代わりし、その姓で呼ばれるようになった新田もありました。

**もっとくわしく**

『ところざわ歴史物語』44～45、52～53ページ

『所沢市史　上』622～631、646～666ページ・『所沢市史　文化財・植物』43～46ページなど

近世

# 農民の生活

## ○丘陵の農業・台地の農業

水が不便な所沢で農業の中心は畑でした。川沿いや丘陵の谷戸（やと）には水田も作られましたが、水が十分ではないためごく小規模なものでした。肥料には、草や落ち葉を発酵させたり燃やして灰にしたものが用いられ、やがて購入されるようになりました。

武蔵野新田など台地上の畑では、土地がやせて水も思うように得られず、耕作には苦労がつきものでした。寛延４年（1751）、やせた土地でも栽培できる作物として、南永井でさつまいもの栽培が始まりました。

## ○国指定重要文化財小野家住宅

林二丁目の小野家住宅は、江戸時代の開拓農家の面影を残す建物です。茅ぶきの屋根で軒が低く、内部に入ると土間が建物の半分近くを占めています。広い土間は縄ない（縄作り）や農具の手入れをする場所として使われました。座敷は、板の間２つと「オク」と呼ばれる畳が敷かれた１間から成るシンプルなつくりになっています。

**もっとくわしく**

『ところざわ歴史物語』48～49、54～55ページ

『所沢市史　上』679～684ページ・『所沢市史　文化財・植物』6～11、141～144ページなど

近世

# 三八の市と所沢の町場

## ○町場の繁栄

所沢の町場は、古くは南北に伸びる鎌倉街道沿いに発達し、江戸に幕府が開かれると、集落の中心は東西に伸びる江戸街道沿いに移りました。道が集まる交通の要衝は、日用品を買ったり農作物を売ったりする必要性から「市（いち）」が開かれ、近隣の農村の経済的な中心となりました。

所沢の市は三と八のつく日付に月6回開催され、三八の市（さんぱち）と呼ばれました。穀物や炭、肥料など生活必需品のほか、江戸時代後期には綿織物の取引などでにぎわい、有力商人が何人も現れます。

幕末、開国により国内の物価が上がる一方で、生糸（きいと）などの輸出で富を蓄えた商人もおり貧富の格差への不満から、富裕な商人や農家を対象とした打ちこわしが起こります。慶応２年（1866）の武州世直し一揆では、所沢の町場の商家をはじめ、大字城や大字下安松でも蔵や家屋をこわされる被害がありました。

打ちこわしによる柱のきず

**もっとくわしく**

『ところざわ歴史物語』56～57、64～65ページ

『所沢市史　上』539～542、793～796、836～855ページなど

近代

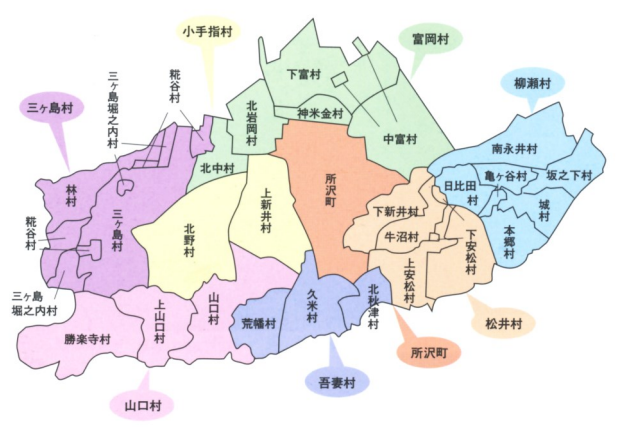
# 明治維新と所沢の近代化

## ○新しい時代と所沢の村々

明治維新により社会の体制は大きく変りました。明治4年（1871）の廃藩置県（はいはんちけん）後、市域の村々は**入間県**、**熊谷県**を経て**埼玉県**となりました。人口規模の小さかった新田の村々などは合併を求められ、北岩岡・北中・神米金などの地名はこの時生まれました。

明治22年（1889）以降、制度の改定によってさらに合併が進み、現在の地区のもととなる柳瀬・松井・富岡・小手指・三ケ島・吾妻・山口の各村が誕生します。

これより先、明治14年（1881）に所沢村は**所沢町**と名称を改めました。所沢には郵便局、警察署などが新たに設けられ、消防組の整備も進んで近代的な体制が整えられていきます。




**明治天皇行在所跡**
（市指定文化財）

明治16年（1883）軍の演習の視察のため明治天皇が飯能に行幸しました。この時元町の斉藤家が宿泊地として選ばれ、天皇は行き帰りの２回同家に宿泊しました。現在でも天皇が宿泊した部屋が「行在所」として大切に保存されています。

**もっとくわしく**
『ところざわ歴史物語』84～87、92～95ページ
『所沢市史　下』44～51、115～126、148～154ページ・『所沢市史　文化財・植物』202ページなど

近代

# 繁栄への道のり

## ○鉄道の開通

所沢駅は、**川越鉄道**（現在の西武新宿線・国分寺線）の駅として明治28年（1895）に開設されました。大正4年には、現在の西武池袋線の前身である**武蔵野鉄道**が開通して所沢駅と接続され、小手指駅（現在の西所沢駅）、元狭山駅（現在の狭山ケ丘駅）も新設されました。鉄道の開通は、その後の町の発展に大きな役割を果たしていきます。

**駅の設置**

明治28年・所沢駅
大正４年・西所沢駅（←小手指駅）
　　・狭山ケ丘駅（←三ケ島村駅←元狭山駅）
昭和４年・西武球場前駅（←狭山湖駅←村山駅←村山貯水池駅←村山公園駅）
　　・下山口駅（一時休止し昭和51年復活）
昭和26年・新所沢駅（←北所沢駅）
昭和45年・小手指駅
昭和48年・東所沢駅
昭和62年・航空公園駅

## ○所沢織物

江戸時代後半から、狭山丘陵周辺の農村では、農家の副業として絣などの織物が盛んに織られました。これらの織物は、所沢の三八の市でおもに取り引きされたため、**所沢織物**の名で知られるようになりました。

所沢織物は、幕末から明治時代にかけて、輸入糸の導入などにより生産量が増え、明治中期に最盛期を迎えます。しかし、洋服が普及して需要も減り、大衆向けの市場からは後退していくことになりました。

絣の色々な柄
上　カメノコ
中　繭に飛行機
下　ツヅミ

**もっとくわしく**
鉄道：『ところざわ歴史物語』98～99ページ・『所沢市史　下』173～182、284～290ページ
所沢織物：『ところざわ歴史物語』112～113『所沢市史　下』233～243ページなど

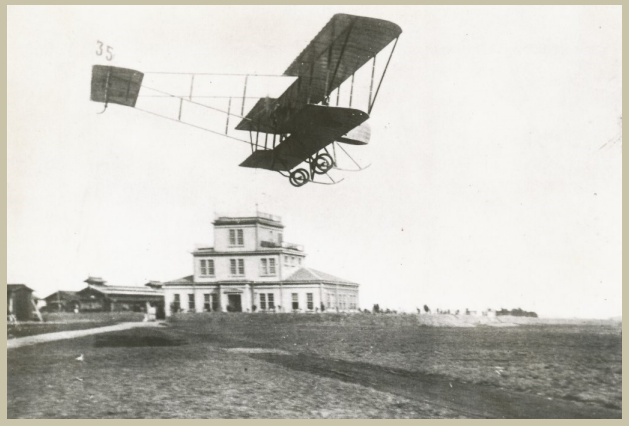
近代

# 飛行場の開設と所沢

## ○所沢飛行場の開設

所沢市は、日本で初めて飛行場が開設されたことから**航空発祥の地**と呼ばれています。所沢が飛行場の場所として選ばれたのは、土地の起伏が少なく落雷の危険が少なかったためと言われています。

明治44年4月5日、**徳川好敏大尉**（とくがわよしとし）が操縦する**アンリ・ファルマン機**と**日野熊蔵大尉**（ひのくまぞう）操縦の**ライト機**により、所沢における初飛行が成功します。その後も、**フォール大佐**を団長とするフランス航空教育団の来日や航空学校の設立など、様々なできごとがありました。



所沢飛行場はその後3回拡張され、昭和20年までに面積は当初の5倍近くになりました。近代の所沢の繁栄は飛行場と密接に結びつき、「飛行場の町」としてそのにぎわいは近隣に大きく鳴り響くことになりました。

**木村・徳田両中尉墜落事件**

大正２年（1913）３月28日、木村鈴四郎中尉と徳田金一中尉が操縦するブレリオ式飛行機は、東京青山での観覧飛行の帰路所沢飛行場を目前に墜落し、両中尉は国内で初めての航空事故犠牲者となりました。

事故後、墜落地の下新井に建てられた記念塔は、現在では航空記念公園に移設されています。

**もっとくわしく**

『ところざわ歴史物語』100～101、118～119ページ
『所沢市史　下』291～318、392～394ページ・『所沢市史　文化財・植物』214～216ページなど

近代

# 戦争の中で

## ○戦争と所沢

明治6年（1873）に徴兵制が実施され、国民をみな兵士にという体制が徹底されます。日清戦争や日露戦争など、国家の戦争に市域からも大勢が動員されました。中でも最大の規模は第二次世界大戦（日中戦争・太平洋戦争）で、出征者は約5,000名、戦没者は1,311名を数えました。

軍事施設を抱え、所沢でも空襲による死者が出ています。生活物資は配給制となり、日々の暮らしは圧迫の一途をたどりました。

**衣料切符**

衣料品の種類ごとに点数が決められ、購入には代金と一緒に必要な点数を渡すことが必要でした。切符がないと、お金を持っていても物が買えませんでした。

## ○一町五村の合併

戦争のただ中の昭和18年（1943）、戦時体制を支えるため、所沢町、松井村、山口村、吾妻村、小手指村、富岡村の**一町五村が合併**しました。三ケ島村と柳瀬村は独立のまま残り、この状態で昭和20年の終戦と新しい時代の到来を迎えることになります。

料亭「婦多佳美」での防火訓練（元町）

**もっとくわしく**

『ところざわ歴史物語』96～97、120～123ページ
『所沢市史　下』475～478、499～509ページなど

現代

# 戦後の所沢

飛行場の「天翔部隊」開拓地（現在の北所沢町）

## ○米軍基地と開拓事業

昭和20年（1945）8月、敗戦と同時に所沢飛行場は米軍に接収され、在日米軍基地として使用されるようになりました。しかしその敷地の一部では、軍に勤務していた人や周辺の農民による農地の開拓が始まっていました。終戦による失業と、差し迫る食糧不足への対策として、国や県はこのような開拓事業を推進し、市内では大字松郷や大字新郷、和ケ原の山林などでも進行していきます。

## ○所沢市の誕生

昭和25年、所沢に市制が施行されました。県内で8番目、人口は42,000人余りでした。5年後の昭和30年には、柳瀬村と三ケ島村が編入され、現在の市域が成立しました。

市制施行記念の山車まつり

**もっとくわしく**

『ところざわ歴史物語』126～129、132～133ページ
『所沢市史　下』513～318、540～543、571～579ページなど

現代

# 基地返還とオリンピック

## ○基地返還運動

米軍が基地を利用していると、住民の雇用など経済効果がある一方で、交通事故や風紀の問題が深刻でした。基地返還を求める声は昭和34年頃から本格化し、運動の結果、昭和46年（1971）に部分返還が実現しました。跡地には国、県、市の協議により、公園、公共施設、住宅などが建設されました。

在日米陸軍所沢基地六割返還式（昭和46年）

クレー射撃場（昭和39年）

## ○東京オリンピック

昭和39年（1964）、戦後復興の象徴として開催された東京オリンピックで、柳瀬地区がクレー射撃の会場に選ばれました。建設された射撃場は、昭和42年の国体などでも使用され、その後昭和47年に閉鎖されました。「オリンピック道路」の通称のある本郷交差点北の道路は、この時建設されたものです。

**もっとくわしく**

基地返還：『ところざわ歴史物語』136～137ページ・『所沢市史　下』579～587、657～667ページ
オリンピック：『ところざわ歴史物語』140ページ・『所沢市史　下』645～646ページなど

現代

# 全国に知られる街へ

## ○住宅都市所沢

昭和32年（1957）の新所沢の開発を機に、所沢は首都圏のベッドタウンとして発展を始めます。各地で住宅開発が盛んになり、小手指や東所沢など駅を核にした町づくりや、松が丘や椿峰のような自然に隣接した町づくりが進みました。人口は急激に増加し、その結果、学校など公共施設の建設も追いつかないほどでした。

ドーム化以前の西武球場（昭和60年）

## ○所沢、全国区へ

人口が急増し右肩上がりの所沢に、昭和54年、西武ライオンズ（当時）が進出します。同じ頃、所沢は「航空発祥の地」をかかげ、「航空記念公園」や「プロペ通り」などちなんだ名前が生まれます。昭和57年には陸運支局が大字松郷に開設されて所沢ナンバーの車が出現、所沢の知名度を全国に広げました。

**もっとくわしく**

『ところざわ歴史物語』138～139、144～145ページ
『所沢市史　下』599～612ページなど

現代

# 新たな時代、新たな価値観

## ○環境への関心

平成2年、市制施行40周年を迎えた所沢では、人口が30万人を超え、平和都市宣言の制定や海外の姉妹都市との交流など、成熟への道を歩んでいました。

国民的アニメ映画「となりのトトロ」に、所沢ゆかりの地名が登場し、そこに描かれた美しい里山の風景は、狭山丘陵など身近な自然への関心を高める後押しとなりました。

一方、平成7年にダイオキシン類による環境問題が報道され、所沢の名はマイナスの意味で大きく注目されます。これがきっかけで全国的にダイオキシン類の有害性が問題になり、市でも、全国初のダイオキシン類条例の制定など、さまざまな取組を重ねました。

トトロのふるさと基金による
ナショナルトラスト6号地

## ○中心市街地の歴史的建造物

江戸時代以来、町場として発展してきた銀座通り周辺の中心市街地では、所沢駅近くがにぎわうにつれ、相対的な活力の低下に苦しんでいました。その対策として、高層ビルを建設して住宅や商業・公共施設などを設け、土地を効果的に利用しようという再開発が計画されます。

こうした再開発によって中心市街地の景観は一変し、江戸・明治からの伝統をくむ見世蔵（12ページ参照）など、古いものの価値を再発見する気運がもたらされました。

**もっとくわしく**

『ところざわ歴史物語』146～147ページ

民俗

# 昔のくらし

## ○衣服

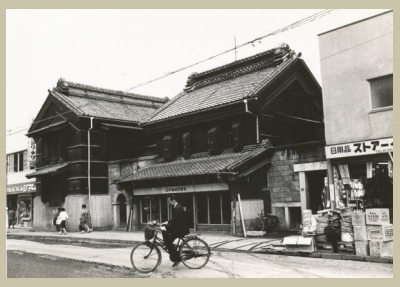
昔は衣服はほとんど自家製でした。女性は機織りができなくてはならず、木綿の縞や絣は仕事着に、養蚕で出たくず繭から作った糸で織られた絹は、仕事着よりも良い着物に仕立てられました。また頼まれて織る賃機（ちんばた）は、現金を得る手段にもなりました。

昭和14年頃の仕事着

## ○住まい

町場の住まいでは、通りに面した細長い敷地に建物が配置され、間口は狭く、店、住まい、中庭、蔵などが奥へ続き、隣家との間には細い路地が設けられました。商家が多く家々が密集した町場では、屋根が瓦でふかれ壁がしっくいで塗られた火事に強い見世蔵（みせぐら）がしばしば建てられました。

農村では、季節風を避ける屋敷林に囲まれた広い敷地に、母屋、蔵、物置などが配置されます。道からはジョウグチと呼ばれる道が畑の間を通って家の敷地に続いていました。



町場の見世蔵（昭和43年頃）

大字南永井の農家（昭和43年）

**もっとくわしく**

『ところざわ歴史物語』160～161ページ

『所沢市史　民俗』333～389、477～490、525～526ページ

民俗

# 所沢の郷土食

## ○手打ちうどんとゆでまんじゅう

市内には多くの「手打ちうどん」屋があり、地元の味として親しまれています。台地に位置し、水田の少ない所沢では、小麦粉で作るうどんが、昔から行事のたびに膳に上ってきました。

うどんは小麦粉に塩を入れ、ぬるま湯を少しずつ加えて混ぜ手や足も使ってよくこねます。つけ汁で食べるのが一般的で、ゆでたほうれんそうやなすなどの野菜が「かて」として添えられます。

ゆでまんじゅうも小麦粉で作る行事食で、小麦粉で練った皮に小豆のあんを入れ、蒸すかわりにお湯でゆでます。新麦の収穫の時期、七夕や盆などに食べたそうです。「うでまんじゅう」と呼ばれることもあります。

## ○焼きだんご

しょうゆの焦げる匂いについ誘われる焼きだんごは、所沢の「B級グルメ」として親しまれる味です。本来はうるち米の粉で作られ、水で練って丸め、蒸したものを竹串にさし、しょうゆを塗って炭火などで焼きます。

焼きだんごはもともと、作業の間に食べるおやつとして家庭で作られたようです。やがて店でも売られるようになり、今やすっかり名物として定着しました。

**もっとくわしく**

『ところざわ歴史物語』161ページ

『所沢市史　民俗』462～469ページ

民俗

# まつりと民俗芸能

## ○所沢のおまつり

神社や寺院などで季節季節におこなわれる祭りは、身体の安全や豊作を祈ったり、収穫に感謝する意味だけでなく、生活の節目として暮らしに深いかかわりを持っていました。

市内のあちらこちらで見られるのは暑い盛りの７月におこなわれる**天王様**です。疫病避けのおまつりとされ、場所によって少しずつ特徴が異なるのも見ものです。

毎年10月第２土曜日には山口地区瑞岩寺（ずいがんじ）で**岩崎の篠獅子舞**（ささらししまい）が開催されます。山伏を先導にササラという竹の楽器で音を鳴らす係のササラッコや２頭の牡（お）獅子、１頭の雌（め）獅子が登場し、結界の中で舞いを披露します。

同じ10月には中心市街地で**ところざわまつり**が開催されます。趣向をこらした華やかな山車が引き回され、山車の上ではにぎやかに祭り囃子（はやし）が演奏されます。

岩崎の篠獅子舞

この祭り囃子の流派のうち、所沢でもっとも盛んなものは**重松流**（じゅうまりゅう）と呼ばれる流派です。江戸時代後半に古谷重松（ふるやじゅうまつ）という人が創始したため、このように呼ばれています。

**もっとくわしく**

『ところざわ歴史物語』152～159ページ

『所沢市史　民俗』245～291、307～317、657～703ページ

民俗

# 伝統産業・地場産業

## ○製茶

お茶は市の名産品のひとつで、農産物の中でも大きな栽培面積を占めています。当初、畑のあぜに風よけとして植えられた茶の栽培は、江戸時代中期から盛んになり、明治時代以降は、**狭山茶**としてブランド化しました。

## ○養蚕

養蚕は短期間で現金収入が得られるため、農作業のかたわら盛んに行われました。養蚕が始まると作業は家族総動員で、また、期間中は蚕のための場所が人間の寝食よりも優先される状況でした。かつては蚕のえさにする桑畑がいたる所に見られましたが、現在では養蚕を続けている家はごくわずかです。

## ○地場産業

**安松ざる**（やすまつ）は、松井地区の安松を中心に生産された竹細工です。その歴史は古く、室町時代や江戸時代の書物にも記されています。プラスチックが普及するまで、食べ物の器や農作業に使う運搬具など、生活用具として盛んに作られました。

また、所沢は**雛人形**（ひな）や**押絵羽子板**（おしえ）など、季節商品の産地でもありました。

**もっとくわしく**

『ところざわ歴史物語』114～115、162～163ページ

『所沢市史　民俗』80～90、125～145ページ

所沢飛行場
（9ページ掲載）

木村徳田両中尉記念塔
（9ページ掲載）

小野家住宅
（7ページ掲載）

砂川遺跡
（5ページ掲載）

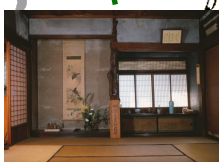
小手指ヶ原古戦場碑
（5ページ掲載）

西武球場
（11ページ掲載）

トトロの森6号地
（11ページ掲載）

岩崎の能獅子舞
（13ページ掲載）

東の上遺跡
（5ページ掲載）


明治天皇行在所跡
（8ページ掲載）

さやまがおか
しんところざわ
こてさし
生涯学習推進センター
こうくうこうえん
埋蔵文化財調査センター
にしところざわ
ところざわ
しもやまぐち
山口民俗資料館
せいぶきゅうじょうまえ

**中富民俗資料館**（大字中富1548-1）第1土曜・第3日曜・第2・4金曜に開館　**柳瀬民俗資料館**（大字亀ケ谷279-3）第2土曜・第4日曜・第1・3金曜に開館　**山口民俗資料館**（大字山口1529-10）第3土曜・第1日曜・第2・4木曜に開館

**開館時間（三館共通）：午前9時～午後4時30分　★民俗資料館に関する問い合わせ…文化財保護課04-2991-0308**

**埋蔵文化財調査センター**（北野2丁目12番地の1）月曜～金曜に開館　**開館時間：午前8時30分～午後5時15分**

**★問い合わせ…埋蔵文化財調査センター04-2947-0012**

| 年　代 | で　き　ご　と |
|---|---|
| 約20000～13000年前 | 砂川堀流域などに石器を用いる人々が活動 |
| 約9500～4000年前 | 市内各地に縄文土器を用いる人々が居住 |
| 西暦600年代 | 滝之城横穴墓群・北秋津横穴墓群などが作られる |
| 西暦700年代 | 東山道武蔵路が作られる<br>久米に大規模な集落ができる（東の上遺跡） |
| 1156（保元元） | 山口氏ら源義朝に従い京都で戦う（保元の乱） |
| 1192（建久3） | 源頼朝、征夷大将軍になる |
| 1221（承久3） | 山口氏ら幕府軍に加わり承久の乱で活躍 |
| 1333（元弘3） | 新田義貞が倒幕の旗上げ |
| 1338（暦応元） | 足利尊氏、征夷大将軍になる |
| 1368（応安元） | 足利氏・上杉氏に反抗して山口氏没落 |
| 1486（文明18） | 京都の僧道興、観音寺に立ち寄る |
| 1590（天正18） | 豊臣秀吉が小田原北条氏を攻める |
| 1591（天正19） | 徳川家康、家臣に所沢周辺を領地として与える |
| 1603（慶長8） | 徳川家康、江戸幕府を開く |
| 1639（寛永16） | 所沢市祭文が作られる（市のはじまり） |
| 1694（元禄7） | 柳沢吉保、三富新田の開発を命じる |
| 1723（享保8） | 幕府による武蔵野新田の開発はじまる |
| 1751（寛延4） | 南永井でさつまいもの栽培はじまる |
| 1866（慶応2） | 武州世直し一揆が起こる |
| 1868（明治元） | 明治維新 |
| 1871（明治4） | 廃藩置県により入間県などできる |
| 1873（明治6） | 前年の学制公布により所沢小学校などできる |
| 1874（明治7） | 神米金村できる |
| 1875（明治8） | 山口村、上山口村、北岩岡村、北中村できる |
| 1881（明治14） | 所沢村が所沢町と改称 |
| 1883（明治16） | 明治天皇、所沢町の斉藤家に宿泊 |
| 1889（明治22） | 新しい制度により、所沢町、柳瀬村、松井村、富岡村、小手指村、三ケ島村が成立 |
| 1891（明治24） | 吾妻村成立 |
| 1895（明治28） | 久米川～川越間に川越鉄道開通、所沢駅できる |
| 1902（明治35） | 山口村成立 |
| 1904（明治37） | 日露戦争に市域から500名以上出征 |
| 1911（明治44） | 所沢飛行場で徳田大尉らによる初飛行 |
| 1913（大正2） | 木村、徳田両中尉の墜落事故が起こる |
| 1915（大正4） | 武蔵野鉄道開通（池袋～飯能間） |
| 1919（大正8） | フォール大佐を団長とする航空教育団来日 |
| 1923（大正12） | 関東大震災起こる |
| 1929（昭和4） | 山口貯水池の建設がはじまる |
| 1943（昭和18） | 1町5村が合併し所沢町となる |
| 1945（昭和20） | 終戦により飛行場に米軍が進駐する |
| 1946（昭和21） | 旧飛行場周辺などで開拓がはじまる |
| 1950（昭和25） | 市制が施行される |
| 1955（昭和30） | 三ケ島村と柳瀬村を合併し、現在の市域となる |
| 1957（昭和32） | 新所沢地区に公団が建設される |
| 1964（昭和39） | 南永井がオリンピッククレー射撃の会場となる |
| 1971（昭和46） | 所沢基地の約6割が返還される<br>関越自動車道開通所沢インターチェンジができる |
| 1973（昭和48） | 武蔵野線開通東所沢駅ができる |
| 1978（昭和53） | 県営所沢航空記念公園完成 |
| 1979（昭和54） | 西武ライオンズ球場完成 |
| 1982（昭和57） | 陸運事務所所沢支所開設、所沢ナンバー登場 |
| 1996（平成8） | ダイオキシン類等の環境問題が報道される |
| 2010（平成22） | 市制施行60周年、トコろん誕生 |
| 2011（平成23） | 東日本大震災起こる<br>所沢の航空発祥100周年 |
| 2020（令和2） | 市制施行70周年<br>ところざわサクラタウンオープン |

# もっと所沢について知るために…

## ○ふるさと研究活動とは

ふるさと研究活動は、幅広い世代の市民の参加により、ふるさと所沢 の自然・歴史・芸術・文化・産業などさまざまな分野の資料を蓄積し、市民の自立した学習によって所沢への愛着を深め、生涯学習の推進とまちづくりに寄与していこうとする活動です。

## ○三ヶ島葭子資料室

40歳7か月の生涯に、6千首以上の短歌を残した所沢出身の歌人、三ヶ島葭子に関する資料を展示しています。

所在地：所沢市三ケ島5-1639-1
（三ケ島まちづくりセンター内）
見学時間：午前8時30分～午後5時
※月曜・祝日・年末年始を除く

## ○常設展示室

生涯学習推進センター3階には、所沢の自然・歴史に関する常設展示室があります。また、閲覧学習室では所沢市史や地図・航空写真などの資料を調べることができます。

開室時間：午前9時～午後5時
※土日・祝日・年末年始を除く

## 所沢市史ダイジェスト版「ところざわ歴史物語 増補改訂版」のご案内

**内容（もくじ）**


第一章　古代
- 所沢の地形と武蔵野台地
- 砂川遺跡と旧石器時代
- 縄文時代の集落
- 弥生時代のムラ
- 古墳時代の所沢
- 古代社会と所沢

第二章　中世
- 武蔵武士と鎌倉幕府
- 倒幕の戦いと鎌倉街道
- 南北朝時代の所沢
- 鎌倉府体制と所沢
- 戦国時代のはじまり
- 小田原北条氏の支配
- 中世の村落と城館跡
- 信仰と板碑
- 中世の美術工芸
- 中世文学と武蔵野

第三章　近世
- 近世のはじまり
- 村の成り立ち
- 秣場と開発
- 三富新田の開発
- 鷹場とお犬様
- 農民の生活
- 村社会の変化
- 武蔵野新田開発
- 武蔵野の農作物
- 宿と三八市の成立
- 商人の活躍
- 文政の改革と組合村
- 幕末の動揺
- 武州世直し一揆
- 寺子屋と庶民教育
- 村の文化人
- 在郷の絵師
- 俳諧の流行
- 村から出た芸能人・力士
- 旅と信仰
- 医療に尽くした人々

第四章　近代
- 戊辰戦争と所沢
- 品川県から入間県、熊谷県へ
- 大区小区制と合併
- 地租改正と学制の公布
- 自由民権期の所沢
- 所沢村から所沢町へ
- 新町村の誕生
- 日清・日露戦争と所沢地域
- 鉄道の敷設
- 所沢飛行場の開設
- 大正デモクラシーと所沢
- 地方改良運動と所沢
- 電灯の普及と娯楽施設
- 文芸を志した人びと
- 大正・昭和初期の教育
- 所沢織物の盛衰
- 地場産業の展開
- 昭和不況と山口貯水池の建設
- 航空教育と飛行場の拡張
- 出征兵士と戦時体制
- 戦時下の合併と戦争の激化

第五章　現代
- 敗戦直後の所沢
- 戦後の開拓
- 民主主義教育のはじまり
- 『所沢市』の誕生
- 社会運動と文化活動の展開
- 基地返還への道のり
- 公団の進出
- 東京オリンピックのころ
- 産業の動向
- 成熟社会への歩み
- 新世紀ところざわへ
- 平成から令和へ

第六章　民俗
- 年中行事
- 祭りと信仰
- 岩崎の餝獅子舞
- 重松流祭り囃子と山車まつり
- 衣食住
- 生産生業
- ところざわむかしむかし

増補
- 災害の記憶
- くらしの変化

付録
- 地区の歴史
- 歴代町村長変遷表
- 指定文化財
- 所沢の神社・寺院
- 所沢の川
- 歴代市長と主な政策
- 市内小学校変遷図
- 年表


令和2年増補改訂版
所沢市教育委員会編集発行
A4並製本
オールカラー228ページ
文化財保護課（生涯学習推進センター内）
市役所市政情報センターで
販売中（価格：2000円）

## もっともっとくわしく…
## 所沢市史（全14巻）

上・下（通史）　原始・古代史料　中世史料　近世史料Ⅰ　近世史料Ⅱ　近代史料Ⅰ　近代史料Ⅱ　現代史料　地誌　社寺　文化財植物　民俗　写真集所沢

生涯学習推進センター閲覧学習室や図書館で利用できます。
※購入についてはお問い合わせください


ふるさと所沢早わかり本改訂版
令和5年10月
発行：所沢市教育委員会
編集：文化財保護課ふるさと研究グループ
〒359-0042　所沢市並木6-4-1
電話04-2991-0308　FAX04-2991-0309
編集協力：埋蔵文化財調査センター